

「東大教師が新入生にすすめる本」

玉井哲雄（総合文化研究科・教養学部教授／ソフトウェア工学）

編集部からの指定：

- ① 私の読書から 印象に残っている本
- ② これだけは読んでおこう 研究者の立場から
- ③ 私がすすめる東京大学出版会の本
- ④ 自分の著書

- ① 『人間はどこまでチンパンジーか?—人類進化の栄光と翳り』

ジャレド・ダイヤモンド／長谷川真理子訳（新曜社，1993）

ヒトの DNA がチンパンジーと 1.6%しか違っていないということを出発点とし、次々と深遠な疑問を投げかける。たとえば「ヒトの子は通常一人ずつ生まれ、父親も面倒を見るのはなぜか」、「ヒトはなぜ隠れてセックスをするのか」、「なぜ歳をとるのか」、「ヒトはなぜ戦争をするのか」など。これらを踏まえて、人類が地球環境を破壊しつつある状況と原子爆弾によって絶滅する可能性まで論ずる。このように従来なら哲学が扱ってきたような壮大なテーマを、動物進化論、比較言語学、その他もろもろの科学的論証を駆使して、説得的な議論を展開する。

ダイヤモンドはその後、『銃・病原菌・鉄』、『文明崩壊』などの本を出しており、いずれも無類に面白い。できればこれらを元の英文で読むとよい。きわめて明快で読みやすい文章だ。どれも大冊だが、大学生になったらこれくらい長い英語の本を楽しんで読めるようになってほしい。

『レトリックの意味論』

佐藤信夫（講談社学術文庫）

佐藤信夫のレトリック論は講談社学術文庫に 5 冊収められているが、どれを読んでも面白い。言語学とか記号論というと難しそうに思うかもしれないが、佐藤の明晰な文章を読むだけで十分楽しめるはずだ。

- ② 『ゲーデル、エッシャー、バッハ—あるいは不思議の環』

ダグラス・R・ホフスタッター／野崎昭弘、はやしはじめ、柳瀬尚紀訳（白揚社，1985）

元の本が出版されたのが 1979 年だから 32 年前になるが、その内容は決して古びていない。情報科学の分野を超えて大きな衝撃を与えた本である。これもダイヤモンドの本と同様に、なるべくなら英語で読むとよい。

- ③ 『ほかほかのパン（物理学者のいた街 2）』

太田浩一（東京大学出版会，2008）

太田さんは 4 年前まで駒場の物理の先生だったが、その博識ぶりは驚嘆に値する。このシリーズはすでに 3 冊出ているが、いずれも欧米の物理学者、数学者のいた街を自分で訪ねて、生家や墓や仕事場を探索する。単なる紀行でなく、人とその学問を掘り

起こすが、太田さんの教養は物理学の範囲にとどまらず、モーツァルトやシューベルトなどの音楽家も出てくれば、ヘルダーリンやヘッセのような作家も頻繁に登場する。

④ 『ソフトウェア工学の基礎』

玉井哲雄（岩波書店，2004）

本の帯にある惹句を引用すると、「目に見えず重さもない製品をいかに作るのか。モデル化，設計から保守・発展までを解説」となる。宣伝ついでに言えば，2004 年度の大川出版賞を受賞した。